依存癖

境水月

写し出された灰色の膿
侵犯していた時計の針
硬直した空気が
ここから一歩も踏み出せない
時を経る生物だろ

話そう
涙しよう
鼻啜ろう
動作しようとしても
思念が漂うだけ

「悲しかったの」
「つらかったの」
「伝えたかったの」
こだまする拡大された極小
きっかけは他者

そうあるべきだった
反転する膿はモノトーン
こころはみすぼらしく
他者に化かした影に怯えてた
母の乳房は遠い過去

悲しい習性
武器は時間
弱点は行動
限りある空間が消えてしまわないうちに

ただ焦る痩せ細った心

思念の針を刺すたびに
こころは疼き
風化を促進する
利用できなかった
他者の息遣い

孤独の烙印
否定したかったんだろ
どこかでひよってた
かなしかったんだろ
過去の痛みが躊躇を呼び込む

理由が領域を侵犯していた
消せば消すほど白くなった
増殖した境界線は無意味なのさ
闘う心を持ち続けた逃走船は
気がつけば出港していた

無機質なレンズの冷たさ
透明な色合いは虚空のよう
漂う雲と汚物に
嘔吐する動作は快感を得て
空自になったという錯覚に変化する
研ぎ澄まされた幻視感覚
触覚を忘れたのは太古
鏡はすでにひび割れている
影に生きる蛆
だからいわないこっちゃない

遠い早いのない世界に
閉じ込められた白
反発を受けながら
這いつくばっても
あれはうごめいている

ボロボロと崩れていく
美系だったね
剥がれ落ちた銀紙に
チョコレートのような苦味が
ただただ蝕まれていた

見ないようにした
聞かないようにした
固まっていくオリモノが
場を変えていく
躊躇する覚悟

鼓動の音が拡大され
それがそうでないと感覚したとき
戦慄をすり抜ける
キリキリと軋むドアが開けば
そこはヘブン

び

ナベブタがめくれると
背骨がミシミシ鳴っている
カーテンの隙間
射しこむ光粒
小さな天使を仙骨で吸収

グツグツ泡立つ心
昨日の恥辱に焦がした絨毯
仄かな幸せを奪った雌描
砂糖はたっぷり
同じ料理だっていいんじゃない

透明なブルーを装い
忍び寄って来た小さなレッド
産地特産とブランド輸入
一緒に溜飲していた
痘痕も靨っていう視線が痛かった

カレーの匂いがシャネルと混成
バングアップしたフェイスは化粧色
モーツアルトと残り香
ウィーンは遥か裏側
変色ウイッグは不機嫌そう

白いブラウス
タイトなスカート
無表情に化粧をのせて
能面が笑っている
午後に再生するシンデレラ

デコルテが視線を呼び込み
鎖骨が興奮
まるごと齧りついて赤林檎
秋の日差しは短く
雪の降らなかった季節もめずらしい

銀色反射光は麻酔に埋もれ
遠くに夢見るお姫様
父母の産み落とした醜い残滓
後悔も懺悔も無色なら
こころを占有したのはだれかさん

なかったからおかねをつかった
出口を出たらサングラスをはずした
大きな瞳はマネキンのよう
一新した景色と人心
こころはブルーに笑顔はレッド

会いたいひとがいる
ＣＭは繰返しが頭上を旋回
ビルボードの眩しいアメリカ色
ヒーローはベストを尽くした
忘れていた待ちぼうけ

どんなに異性がたむろっても
ほしいのはあなた
なのに平然と機会を喪失
春だというのに空はいきなり雨模様
パチンとなにかがショートした

老塊

ビートルズが無造作に染めた部屋
ディスプレイに映し出される懐かしい顔
しげしげと見つめる男
ガラスに反射する老醜に落胆し
思わず眼鏡ずらし

どれだけの時が経ったのだろう
緩んだ顎のライン
重く垂れさがった瞼
走馬灯のようにはなにも流れず
固まった首がきしむだけ

チェっと舌打ちする響きは
電子駆動音と調和するように
天井の片隅に吸い込まれていく
この部屋に訪れるのは
気まぐれな雌猫だけ

仕事とのライン
友人とのライン
恋人とのライン
それらは白線で区切られていたはずなのに
いまや、薄れ、侵され、漠とした時間に吸い込まれている。

脱皮した？彼女のきれいになったフォト
ＩＰメッセンジャーが呼びかけてくる
フェイクに化したこちらのフォトに
美しく幾重にも塗り込められた過去の影を引きずっているのか
海辺の風に窓枠がゴトンと動いた

キラキラ輝く波に浮かんだいくつもの帆船が
ユラユラと蜃気楼のように漂っている
意識が定まらなくなったのはいつ
手首が決まらなくなったのはいつ
つくり囁いがわからなくなったのはいつ

水族館が好きだった
水槽に満たされた海水の漉淡を感知し
一瞬のうちに裂け目を見つける
まっすぐに泳ぐ鰹が鋭利な刃物のように
硬度模様に突き抜ける高速度は気持ちいい

こちとら中途半端が指定席
肩をいからせ腰は引けてた
いつのまにか馬鹿にされるのを避けるようになった
溜息を吸い込むブラックコーヒー
豆の匂いは身体の隅々に染みわたる

だからいわないこっちゃない
ひとりで生きてきたつもりじゃない
才能あるつもりじゃない
わかったつもりじゃない
つもりが降り積もって溶けていく

なくすことを恐れた
かわすことを恐れた
出しきることを恐れた
そして置き去りにされることを恐れた
いっそ出し惜しみしていた

死ぬことを願った

老いることを願った
孤独を誇った
嘘を好いた
欺瞞の鏡は磨かれた

春風に時間が手のひらからヒラヒラと零れ落ちた
いくら追いつこうとしても
ネットでコメント書き入れても
恥を世界に晒しただけ
ソーシャルネットワークなんてくそくらえ

頼れるのは身体
たとえ老いさらばえようと
ダイナマイトでふっとばされようと
身体は生き続ける
落葉は風に舞う後始末